

# 北大竹遺跡出土の単鳳環頭大刀について

古間 果那子

**要旨** 埼玉県行田市北大竹遺跡からは、大量の土器、石製模造品、金属製品で構成された祭祀遺構が3箇所検出された。その中から、通常は古墳から出土する単鳳環頭大刀の柄頭と筒金具が出土した。

筆者は、①環内の中心飾りの意匠、②環の文様、③（①、②を踏まえて）系列、④柄頭の製作技法によって、単鳳環頭大刀の型式学的位置づけを行った。その結果、北大竹遺跡例は穴沢・馬目（1986）の龍王山系列、大谷（2006）の翁作古墳刀型に該当することがわかった。

次に関東地方において、同じ型式の単鳳環頭大刀が出土した古墳の墳丘規模と副葬品を比較した。その結果、30 m以下の円墳から90 m級の前方後円墳まで幅広い階層の古墳に配布された大刀ということがわかった。翁作古墳刀型が流通した6世紀後半頃には、すでに大型の古墳が減少しているため、多くは中小規模の古墳から出土している。一方で、千葉県のように「首長墓型」の古墳から複数出土している状況もあり（内山 2022）、配布先の階層は明確に決められていなかった可能性が高い。

## はじめに

埼玉県からは、銀象嵌や金銅製の装飾付大刀が複数発見されている。一方で、単竜・単鳳環頭大刀は少ない（註1）。近年、行田市の北大竹遺跡で検出された祭祀遺構から単鳳環頭大刀が県内3例目として発見された。

本稿では、北大竹遺跡出土の単鳳環頭大刀の型式学的・年代的な位置づけについて示していく。また、同じ型式の単鳳環頭大刀が出土した古墳を整理し、この大刀が関東地方において、どのような階層に配布されたのか考察してみる。

## 1 単竜・単鳳環頭大刀の研究史

戦前は、装飾付大刀を総合的に取り上げ、分類する研究がさかんであった。代表的なものとして、高橋健自が柄頭の形状により分類したものが挙げられる（高橋 1911）。高橋は環頭大刀を含めその他の大刀の名称もこの時点で命名されており、

後藤守一もこの分類を引き継いでいる。そして、現在の研究にも踏襲されている（後藤 1936）。

戦後の注目すべき研究は、向坂鋼二による柄頭以外の<sup>こしらえ</sup>拵によって分類したものである。向坂は、鞘や柄間に用いられる金属板や銀線による分類と後藤に倣った柄頭の分類を対応させ、新たな分類体系を作った。また単竜・単鳳環頭大刀を彫りや環の形状によって細分した（向坂 1971）。

1971年7月、韓国で武寧王陵が発見されたことにより、単竜・単鳳環頭大刀をはじめとする装飾付大刀の研究は大きく進歩した。武寧王陵は百済の王陵で、王と王妃が合葬されていた。その中の王の副葬品として単竜環頭大刀が、王妃の副葬品として「庚子年」と記された銀製腕輪が発見されたのである。武寧王は501年に即位し、523年に没してしることが墓誌や文献からわかっており、「庚子年」は520年にあたる。したがって、武寧王陵に副葬された単竜環頭大刀が520年頃

に製作されたものあり、523 年を大幅に遡らないことがほぼ確実にいえることとなった。

このような年代の定点となりえる遺跡の発見により、単竜・単鳳環頭大刀の実年代を探る研究が盛んとなった。一例として町田章は、国内外の環頭大刀について取り上げた。町田は、武寧王陵刀を「6 世紀型Ⅱ a 式環頭」とし、その年代について「Ⅱ a 式環頭を 500 年代の前期のはじめにおくことができる。」とした（町田 1976）。そして、その他の環頭大刀の年代を比定した。

これら一連の研究の流れで発表された、新納泉による「単竜・単鳳環頭大刀の編年」は編年研究の一つの到達点といえる。新納は最も変化に富む環頭に注目して、型式学的分析を行った（新納 1982）。その結果、環内の中心飾りと環の竜文が次第に崩れていくことがわかり、Ⅰ～Ⅵ式の 6 段階の型式が設定された（以下、新納Ⅰ～Ⅵ式とする）。年代については、定点資料である武寧王陵出土の単竜環頭大刀と共伴した須恵器によって推測している。それによると新納Ⅱ～Ⅳ式は、TK43 型式段階に一齐に副葬されており、倭製の単竜・単鳳環頭大刀は基本的に TK43 型式段階を大きく遡らないと推測されている。

この編年研究は現在でも多くの研究者に用いられている。実年代についてはその後、新たに発見された資料が蓄積されている。今のところ日本において TK43 型式段階を大きく遡る資料は見つかっていない。

新納による編年の枠組みが設定された後、単竜・単鳳環頭大刀の作風に注目して、系列を整理する研究が行われた。

穴沢啄光・馬目順一は、「環内の龍や鳳の頭と環上の文様の類似による型式学的な前後関係にある環頭大刀の柄頭の序列を『系列』と呼び、これを各系列の『最古』の作品を出土した古墳の名に冠して呼ぶことにする。」とし、オリジナルとコピーの関係を明らかにした（穴沢・馬目 1986）。

続けて、「また、ひとつの系列から変化を生じて分岐した、側枝的系列を、仮に、『亜系列』（もしくは、『枝系列』）と呼ぶことにしよう。作風がいくつかの点で類似してはいるが、ひとつの系列におさまらない系列のグループを『系列群』と呼ぼう」と述べた。このような作風による系列や系列群の把握は、単竜・単鳳環頭大刀の研究に新しい視点を与えた。

2000 年代になると文様の検討から一転して、製作技法や柄頭以外の<sup>こしらえ</sup>拵の検討といった、より細かい視点からの分析がさかんとなる。

穴沢・馬目の検討を受け、大谷晃二は中心飾りの技法や環の文様の分類によって、穴沢・馬目が提唱した系列の再検討をおこない、同範あるいは同型の環頭大刀があることを明らかにした（大谷 2006）。そして、穴沢・馬目が設定した系列概念に加え、「環部文様や中心飾を表現するための具体的な手法の共通性による製品の類似性」として「表現様式（作風）」という概念を設定し、工人集団の把握を試みた（大谷 2006）。

また 2000 年代になると、日本から出土した資料が朝鮮半島のどの国から技術系譜を追えるかを追究する研究がなされた。持田大輔は環や環内の中心飾りの製作技法から、百濟以外に伽耶や新羅でも単竜・単鳳環頭大刀が製作されていた可能性に言及した（持田 2006）。また、日本で出土した単竜・単鳳環頭大刀の中にも伽耶や新羅の技術が認められるものがあることから、新納Ⅱ・Ⅲ式段階に伽耶系や新羅系の渡来系技術者が日本列島で大刀の製作を始めたとした。

さらに詳細な製作技法の分析として、金宇大の研究が挙げられる。金は、環にみられる型割り線痕跡や合範製作の痕跡などから、A 技法、B 1 技法、B 2 技法、C 1 技法、C 2 技法、C 3 技法といった製作技法を推測した（金 2015）。そして、各技法の系譜を明らかにした。

このような詳細な観察によって、一部の単竜・

単鳳環頭大刀が合範製作によるものではないことが明らかになったが、これらの技法が妥当なものかどうかについては、今後検証していかなければならない。

以上、研究史を概観した。今後の課題は、近年の研究同様により細かい視点で観察し、製作技法や同範資料について明らかにすることであろう。

ここで忘れてはならないのは、単竜・単鳳環頭大刀が威信財であるという点である。より詳細な工人集団がわかってきた今、どのような被葬者が所持していたのか合わせて考える必要がある。

その点、行田市北大竹遺跡から出土した単鳳環頭大刀は、出土場所や出土状況が特殊だったことから、単竜・単鳳環頭大刀がもつ新たな役割を示唆するものといえる。

## 2 行田市北大竹遺跡出土の単鳳環頭大刀について

### (1) 北大竹遺跡の概要

北大竹遺跡は、埼玉県行田市藤原町・若小玉に所在した遺跡である。現在は加須低地に位置するが、古墳時代には関東造盆地運動で埋没した台地上に位置していた。周辺には若小玉古墳群、埼玉古墳群、酒巻古墳群などの古墳群や、築道下遺跡、小針遺跡といった大規模な集落が存在した。

2019～2020年にかけて埼玉県埋蔵文化財調査事業団がおこなった第18次調査によって、古墳時代の集落跡と祭祀遺構が検出された。祭祀遺構は3箇所の遺物集中として報告されており、土器（須恵器・土師器）、石製模造品、金属製品、玉類が数多く出土した（渡邊・赤熊 2022）。

金属製品は環頭大刀（第1図1, 2）以外に、鉄鉾（第1図3, 4）、直刀（第1図5）、鉄鏃（第1図6～12）、杏葉（第1図13）、鉄製模造品（第1図14, 15）、海獣葡萄鏡、鋤先、鎌などが出土した。このように、数も種類も豊富な金属製品が祭祀遺跡から出土することは珍しい。同様の例として、福岡県沖ノ島祭祀遺跡、千葉県千束台遺

跡、千葉県マミヤク遺跡1号祭祀遺構が挙げられる。これらの遺跡は北大竹遺跡同様、土器や土製品も多く出土しており、金属製品がまとまって出土した祭祀遺跡は、大規模な祭祀がおこなわれた傾向にある。

### (2) 単鳳環頭大刀の出土状況

単鳳環頭大刀は、第2号遺物集中から出土した。第2号遺物集中からは多量の金属製品が出土しており（第1図）、須恵器はTK10型式新段階～TK43型式のものが多い。金属製品は一箇所にまとめて置いた様子はなく、散在していた。一方で、第2号遺物集中の真ん中を横断するように遺物が出土していない空白のエリアがある。

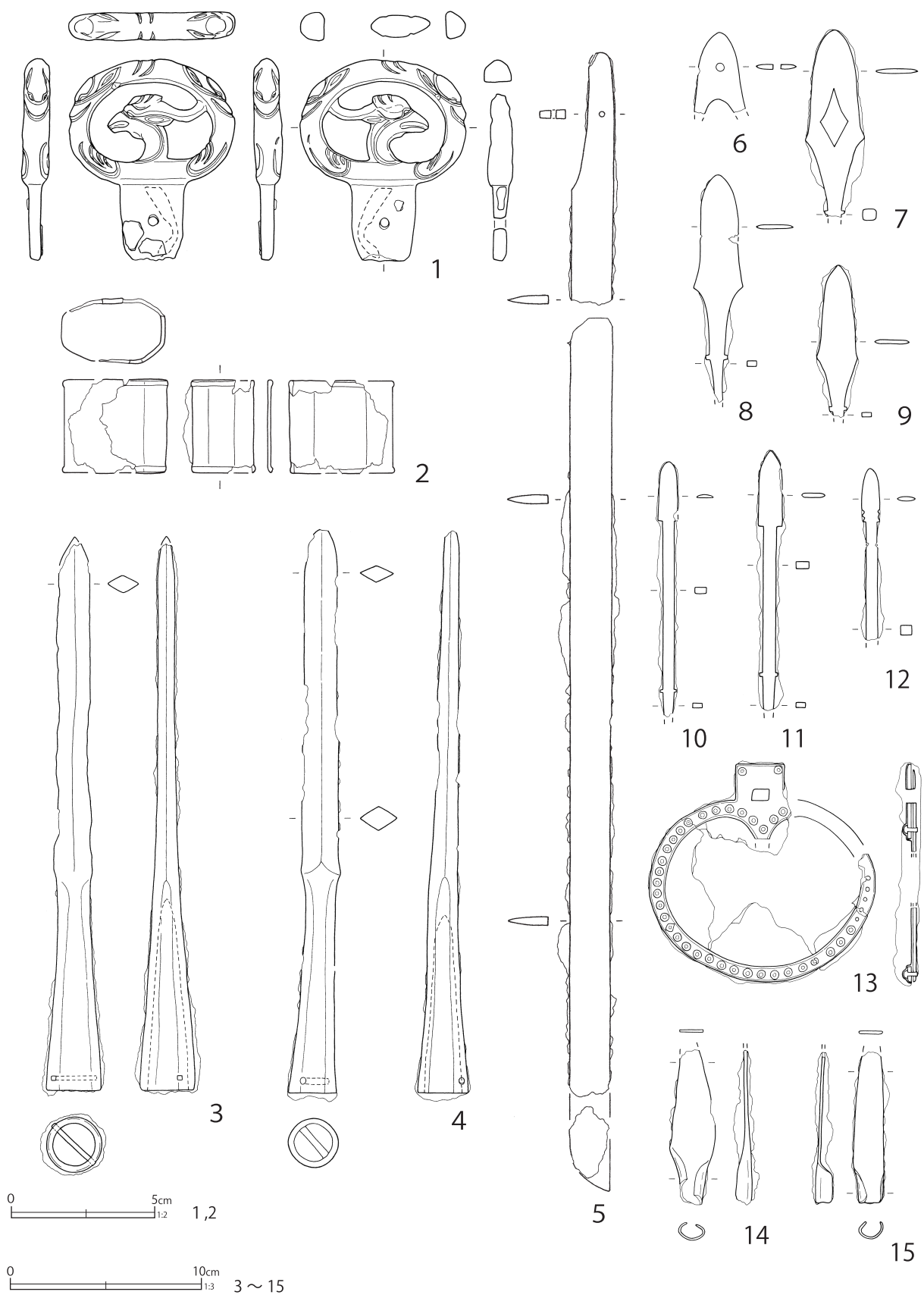
単鳳環頭大刀は、柄頭（第1図1）と筒金具（第1図2）のみ出土しており、近くから刀身は出土していない。第2号遺物集中からは、臼杵熱の分類という撫角片関栗尻中細茎で平造の直刀が出土しているが（臼杵 1984、第1図5）、柄頭と同一個体かどうかは不明である。

祭祀遺跡から単竜・単鳳環頭大刀が出土した例はほとんどない。奈良県天理市の石上神宮禁足地から出土した単鳳環頭大刀の事例があるが、これは明確に祭祀遺構から出土したものとは言えないため、北大竹遺跡の事例が初めてである。

### (3) 型式学的位置付け

単竜・単鳳環頭大刀の型式学的位置付けを考えると、①環内の中心飾りの意匠、②環の文様、③（①、②を踏まえて）系列、④柄頭の製作技法、⑤柄頭以外の拵からのアプローチがある。⑤について、北大竹遺跡からは鞘金具が出土しているが、出土地点が離れているため単鳳環頭大刀とセットになるかどうか判然としないと報告されている（渡邊・赤熊 2022）。そのため、①～④の視点から順に述べていく。

①新納泉による編年研究に従うと、北大竹遺



第1図 北大竹遺跡第2号遺物集中出土の金属製品



跡刀の環内の中心飾りは、「環内の鳳凰は、口に嚙んでいた玉を失うなど、文様の退化が著しい。」とされる新納Ⅴ式に該当する(新納 1982)。また、この段階は単竜・単鳳環頭大刀の量産段階であることが新納によって指摘されている。

②環の文様の変化について新納は6つの段階に分けており、それがそのまま環内の中心飾りで設定したⅠ～Ⅵ式にあてはまるとした(新納 1982)。新納はⅤ式段階の環の文様について、それまで側面を向いていた竜の頭が、上からみたところを表現するように変化したことが最大の特徴であるとした。また、2匹の竜の間にあった4本の肢が2本に減少している点も変化として挙げている。

大谷は新納Ⅴ式段階以降にみられる、環の竜が俯瞰で表現される資料を「背中合型」としている(大谷 2006)。大谷は新納Ⅳ式以降の単鳳環頭大刀に一般的に見られるものとしている。北大竹遺跡刀は、その中でも頭の間の脚1組と雲気が省略されており、後述する千葉県翁作古墳例をはじめとする「龍王山系列」(穴沢・馬目 1986)に類例が多い。

③系列は、穴沢・馬目と大谷らによる分析に従う。結論から言うと北大竹遺跡刀は、穴沢・馬目が設定した「龍王山系列」に該当する(穴沢・馬目 1986)。

穴沢・馬目は龍王山系列の特徴として、「すべて金銅製鑄造品である」、「くちばしを閉じた単鳳環柄頭であり、後毛(角)が弓なりにのびて環に癒着する」、「環上の走龍文は、もはや、龍であることが識別困難なほどに退化した沈刻文と化してしまっている」の3つを挙げている。加えて、この系列で一番古い資料とされる奈良県天理市龍王山C3号墳刀の「くちばしを半ば閉じて」、「頭の上の冠毛は富士山のようになり」、「左右背中合わせの龍頭が飾っているかのように見える」といった特徴は北大竹遺跡刀にもそのまま当てはまる。龍王山系列は、「主流」、「東本郷垂系列」、「西ノ

庄垂系列」、「乗場垂系列」に細分されている。しかし、東本郷垂系列と龍王山系列は区別しづらく、系譜の捉え方に問題があることが指摘されている(大谷 2006)。また、それぞれの垂系列が単純に龍王山系列からの型式変化によって生まれたものかどうかも再考する必要がある。ひとまずここでは、「主流」に該当すると考える。穴沢・馬目は、龍王山系列を畿内付近の工房で製作され、全国に配布されたものと推定している(穴沢・馬目 1986)。具体的な製作遺跡は未発見であるが、北大竹遺跡刀も同様に畿内付近の工房で製作された大刀と考えたい。

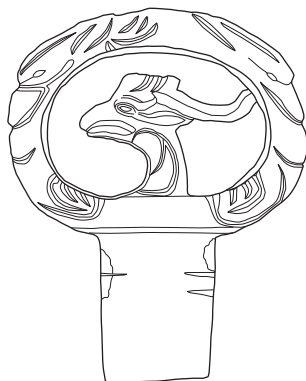
大谷はさらに踏み込んで、龍王山系列の中でも「同じ原型または同じ鑄型を用いるか、または踏み返しを行なったために生じた特徴」が認められる「翁作古墳刀型」を新たに設定している(大谷 2006)。これらの環頭大刀は、龍王山系列の特徴に加え、短いくちばし、環に癒着しない鶏冠といった特徴をもち、同様の特徴をもつ北大竹遺跡刀も翁作古墳刀型とみられる(第2図)。類例として、千葉県翁作古墳刀、群馬県小泉大塚越3号墳刀、山梨県寺の前3号墳刀、京都府岡1号墳刀、兵庫県山田2号墳刀、福岡県湯湧1号墳刀が挙げられている。筆者は、この中に群馬県平井地区1号墳刀も加えたい。北大竹遺跡刀とこれらの類例は、環内の中心飾りの意匠や環の文様が非常によく似ている。またこれらの柄頭は、環の縦径が4.3～4.5cm、横径が5.8～5.95、厚さが0.9～1.15cmに収まるため、大きさもほぼ一致してくる。ただし、茎の長さは2.3～4.5cmと差がある。

大谷は、翁作古墳刀型のような同型・同范品を含む龍王山系列の単鳳環頭大刀を製作している工房を「工房C」としている(大谷 2022)。

④柄頭の製作技法は、金宇大の一連の研究に詳しい。金は詳細な環と中心飾りの観察から、日本列島出土の単竜・単鳳環頭大刀の製作技法を復元した。北大竹遺跡刀はエックス線写真で鑄造した



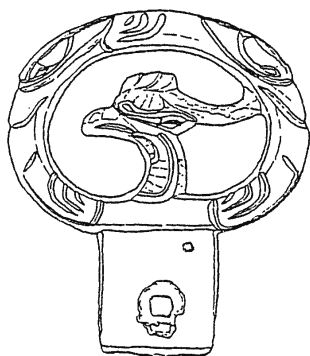
1. 千葉県翁作古墳刀



2. 群馬県小泉大塚越3号墳刀



3. 福岡県湯湧1号墳刀



4. 兵庫県山田2号墳刀



5. 山梨県寺の前3号墳刀



6. 埼玉県北大竹遺跡刀



第2図 翁作古墳刀型

ときにできた鑄巢の痕跡が認められる。この刀は、金が「鑄造段階である程度の大まかな形状をつくり、細部の表現を鑿による切削加工で仕上げるもの。日本列島出土資料の大部分がこの技法で製作される」としたC技法で製作されたものと考えられる（金 2017）。金はC技法を3つに細分しており、北大竹遺跡刀は「線刻表現でのみ文

様を表したもの」であるC3技法に当たる。また、大谷は先述した「工房C」の大刀の製作技法を以下のように想定している（大谷 2022）。①細部をまだ加工していない、のっぺら坊に近い柄頭の原型を使って、合わせ鑄型（合范）をつくる、②これを使い複数の製品を鑄造する、③彫金によって細部を加工して仕上げる。③の工程を金はさら

に細分化しているが、両者の想定した技法はほぼ同じものとみてよい。

金は大谷同様、この技法について合範鑄造を想定しており、環の中心飾りに合範鑄造をした際のラインが見られる資料を挙げていた。北大竹遺跡刀は合範鑄造の痕跡が目視では認められなかったが、類似度が高い翁作古墳刀型が複数あることを踏まえると合範鑄造による製作だろう。

金のいうC技法は、言い換えれば細部の表現の仕上げは工人の腕に左右されることとなる。実際に北大竹遺跡刀を含む「翁作古墳刀型」をよく見ると、中心飾りの嘴や首の太さ、顎毛の有無などに違いがある。これらは削り込みの程度による違いとみられる。例えば北大竹遺跡刀に比べ、群馬県玉村町小泉大塚越3号墳刀は嘴が薄く、削りの痕跡を残さないように消している(第2図2)。また環の文様では、竜の目のラインや竜の頭上にある凹凸の有無に違いがある。ただし、文様配置や中心飾りの表現は共通していることから、同じ工房で作られたものである可能性は高い。

以上をまとめると北大竹遺跡刀は、新納V式、龍王山系列(主流)、翁作古墳刀型に該当し、製作技法はC3技法を用いられた大刀といえる。そして、これらの大刀は畿内周辺のある特定の工房で製作されたものと想定できる。

#### (4) 関東地方における新納V式段階の環頭大刀について

次に、関東地方で新納V式段階の単鳳環頭大刀が出土した古墳の墳丘規模と副葬品の組成を検証する。

##### 群馬県玉村町小泉大塚越3号墳

小泉大塚越3号墳は、埴輪をもつ2段築成の前方後円墳である(全長46m)。主体部は角閃石安山岩を使用した両袖形横穴式石室である。石室内からは、玉類や耳環などの装身具と単鳳環頭大刀、鐔、鞘の飾板、鞘尻金具、鉄刀(第3図1)、

鉄鉾(第3図2,3)、鉄鏃などの豊富な武器、馬具、刀子が出土した(宮塚・三浦1993)。単鳳環頭大刀は、「翁作古墳刀型」とされている(大谷2006)。茎に細い横方向の傷が3箇所ある。

##### 群馬県藤岡市平井地区1号古墳

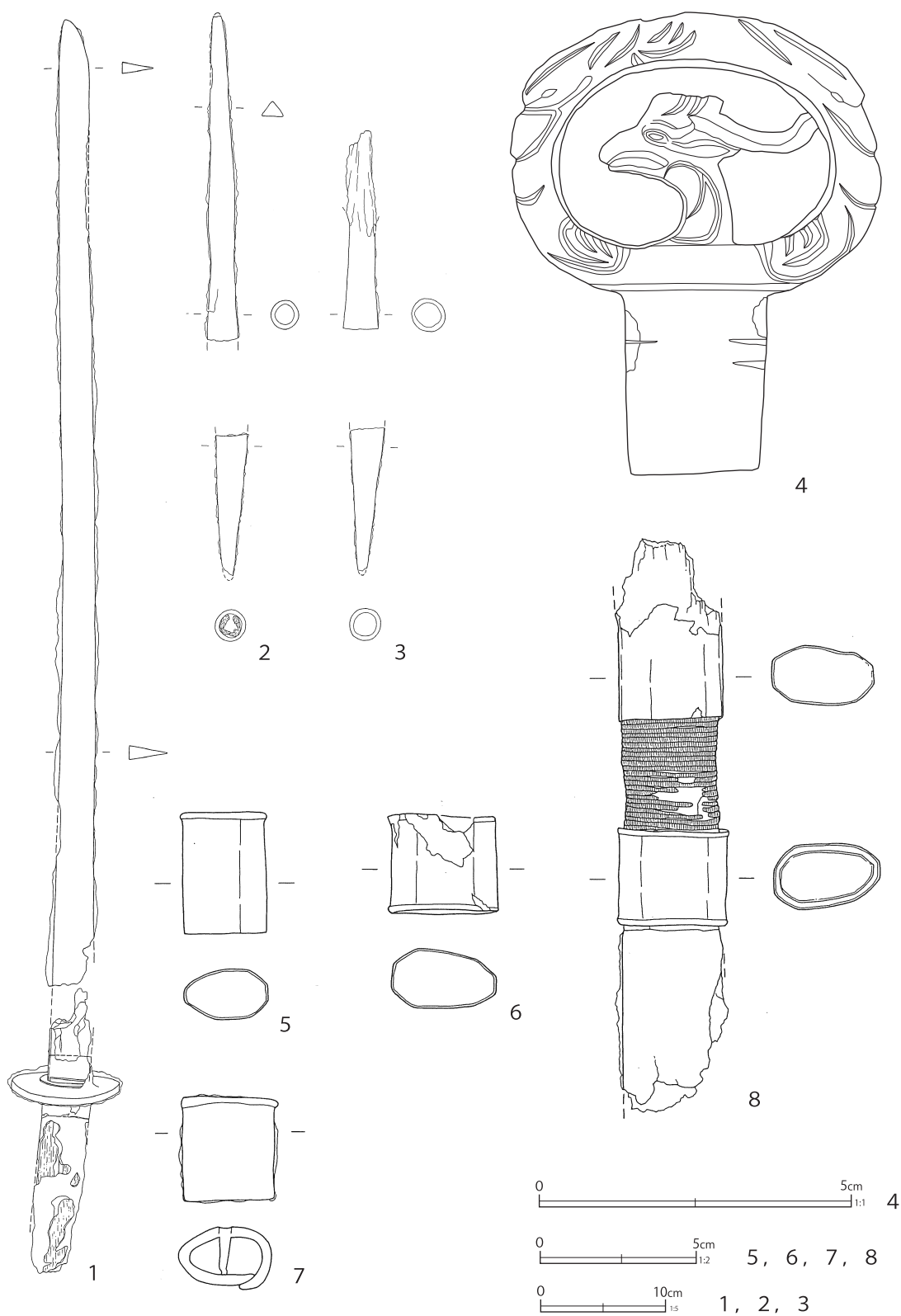
平井地区1号古墳は径24mの円墳であり、埴輪をもっていた。主体部は凝灰岩製の両袖形横穴式石室である。単鳳環頭大刀(第4図1,3)は銀象嵌円頭大刀(第4図4)とともに、切っ先を西に向けて、石室の奥壁中央に沿って置かれていた。また、羨道部から直刀1振が出土した(志村1993)。

他の単鳳環頭大刀が柄頭のみのものであるのに対し、平井地区1号古墳刀は刀全体が出土した。新納VI式を除く大半の単竜・単鳳環頭大刀は、平井地区1号古墳刀のように、鐔はなく鍔が断面八角形の鞘口金具に入る呑口式となっている。鞘は木装で、C字文(鱗状文)を浮き彫りにした銀の薄板で包み、鞘飾り金具で両端を鉤留めしている。刀身は片関で、茎尻は一文字尻である(志村1993)。柄頭は翁作古墳刀型に該当するものと思われる。その他に小札(第4図2)、馬具、鉄鏃といった金属製品が石室内から出土した。

##### 栃木県益子町天王塚古墳(荒久台1号墳)

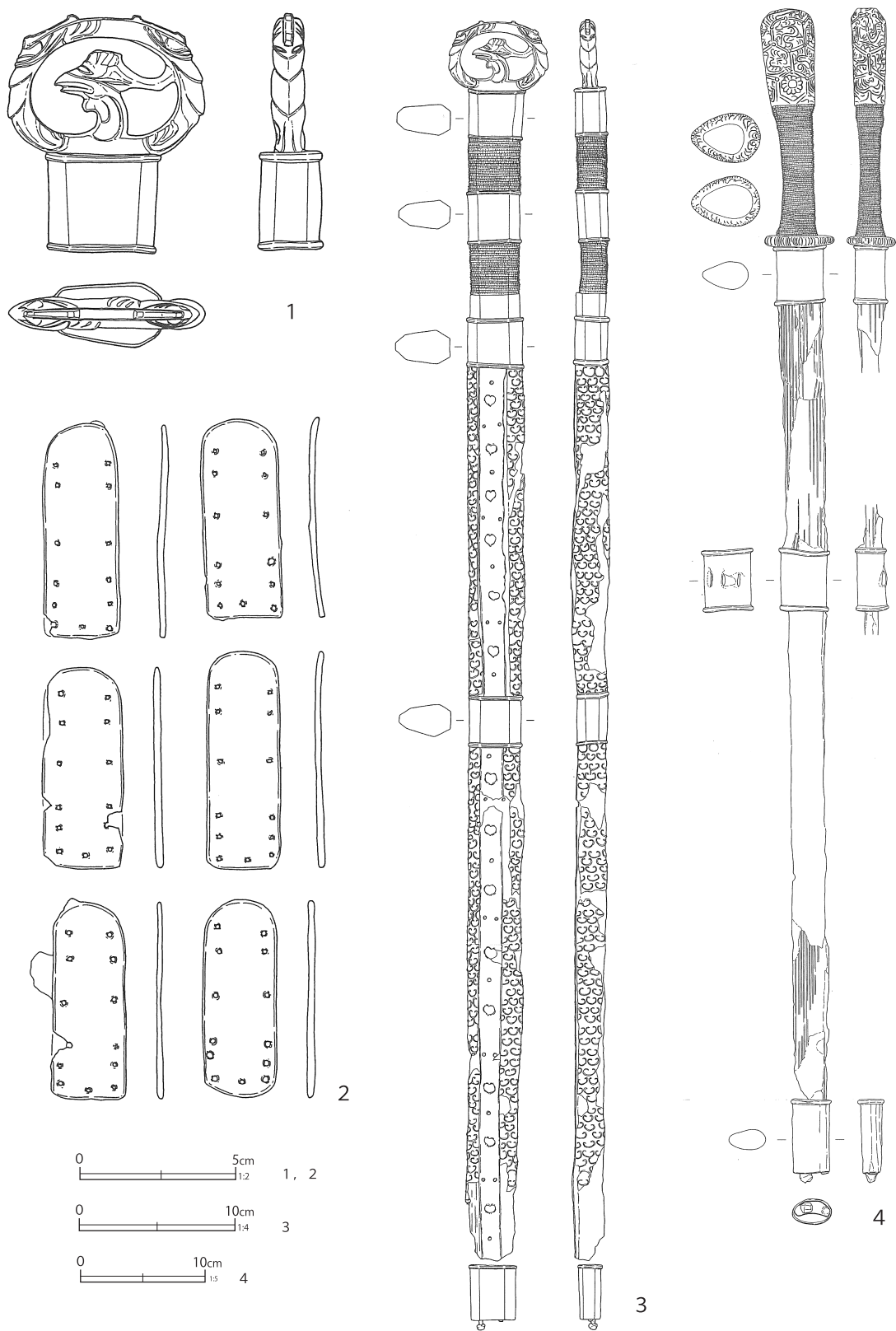
天王塚古墳は全長43mの前方後円墳である。主体部は硬質砂岩製の両袖形横穴式石室であり、埴輪をもつ(栃木県1976)。副葬品は単鳳環頭大刀、直刀、鉄鏃、馬具2組、衝角付冑、小札甲、装身具、鏡が出土している。単鳳環頭大刀は穴沢・馬目により「東本郷亜系列」とされている(穴沢・馬目1986)。また大谷によるとこの大刀も同型・同範の大刀がいくつかあり、城山1号墳の大刀(第5図2)が挙げられている(大谷2006)。この大刀は修理され、全身が復原されている(持田・中條2009)。鞘などは平井地区1号墳例とほぼ同じ作りで、鞘金具のC字文の向きが異なる。

##### 千葉県香取市城山1号墳

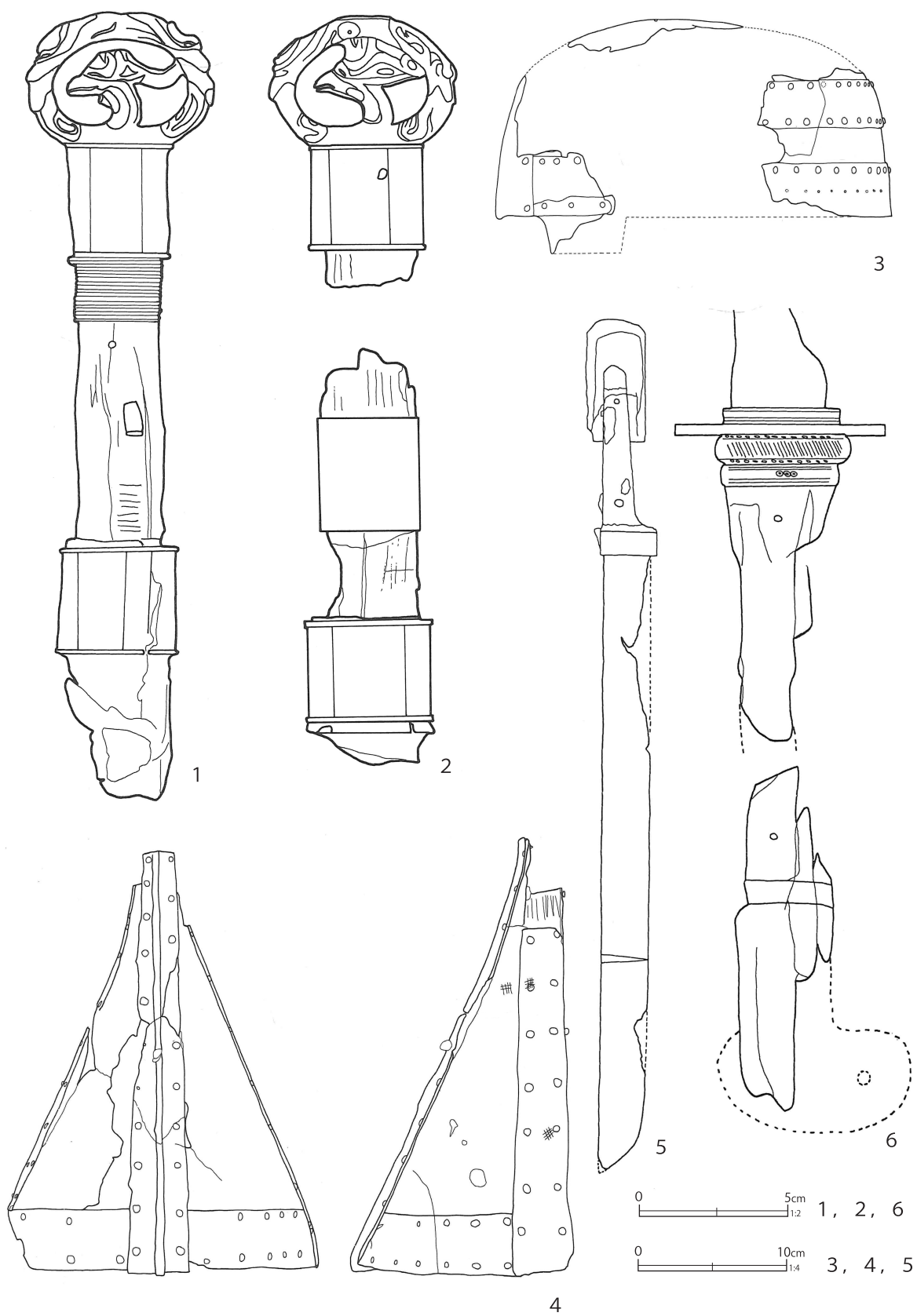


第3図 小泉大塚越3号墳出土遺物





第4图 平井地区1号墳出土遺物



第5图 城山1号墳出土遺物

城山1号墳は全長68mの前方後円墳である。周囲には前方後円墳5基、方墳1基、円墳10基が確認されており、1号墳は主墳にあたるとされている(丸子1978)。主体部は左片袖形の横穴式石室で、市川市法皇塚古墳と並ぶ下総の初期の横穴式石室である。城山1号墳が築造された6世紀後半頃は武蔵、常陸、相模、上総で片袖形の横穴式石室が構築され始めることに注意したい。墳丘には人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪が樹立され、石室南西側の粘土敷から土師器・須恵器が出土した。

副葬品は、ほとんどが石室内から出土した。金銅製品が多く、特に武器類が多いことが特徴とされる(丸子1978)。具体的には環頭大刀5振(第5図1, 2)、円頭大刀1振(第5図5)、頭椎大刀1振(第5図6)、直刀6振が木棺内から出土した。また奥壁に沿って12振の直刀が出土した。環頭大刀は単鳳が3振、単竜が2振である。環内の中心飾りのデザインにかなり差があることから、複数の系列が混在しているものと思われる。単鳳環頭大刀のうち1振は、穴沢らが龍王山系列としているものである(穴沢・馬目1986)(第5図1)。他には横矧板鋌留衝角付冑(第5図3)、挂甲、臑当、馬具(第5図4)、三角縁三神五獣鏡、金銅鈴が出土した。

#### 千葉県木更津市金鈴塚古墳

新納V式が出土しているわけではないが、同時期の最上級の古墳なので触れていく。全長90mの前方後円墳で、金鈴塚古墳からは単鳳環頭大刀が1振出土している。中心飾りが錆びついているので詳細は不明だが、北大竹遺跡刀のような龍王山系列と比べて大刀が長大であることから、舶載品である可能性が指摘されている(大谷2022)。その他、単竜環頭大刀、獅子嚙環頭大刀、双竜環頭大刀、圭頭大刀、頭椎大刀、金銅装倭装大刀などの大刀が複数出土している。また、装身具、馬具4組、鏡、飾履、鉄鏃、鉄鉾、甲冑など多数出

土しており、ここでは説明しきれない。特に装飾付大刀の量と種類の多さは目を引くものであり、北大竹遺跡とは大きく異なる状況である。

以上を踏まえ、新納V式が出土した古墳の墳丘規模と副葬品を比較した結果についてまとめてみる。筆者は墳丘規模によって古墳を第1クラス(61～90m)、第2クラス(30～60m)、第3クラス(30m未満)に分けてみた。

新納V式の環頭大刀が出土する古墳は第1～3クラスと多様である。また、千葉県は第1クラスの古墳のみから出土している。副葬品のうち金属製品は、装飾付大刀、直刀、鉄鏃、鉾、小札甲+衝角付冑などの武器・武具、銅鏡、冠などの装身具、馬具という組合せからなり、低ランクの古墳はこのうちのどれかを欠いている。一方、大刀、馬具、鉄鏃はどの古墳にも副葬されている。大刀では単鳳環頭大刀以外の装飾付大刀を伴う古墳が多く、拵えのない直刀も多数出土する。また、墳丘規模が大きくなるほど大刀の本数は多くなる。馬具は、金鈴塚古墳を除いて1～2組が副葬されていたようである。

北大竹遺跡第2号遺物集中から出土した大刀は単鳳環頭大刀を含め3振と、あまり多くはない。しかし鉄鏃は、破片が多いものの100点以上はあり、また第1・2クラスの古墳にみられる鉾が出土している。祭祀遺跡が最終的に廃棄場であったことを考えると、祭祀を行った人物は他にも多くの威信材を所有しており、その中で副葬予定のない単鳳環頭大刀を祭祀に用いたものと思われる。

### 3 結論・大刀の配布先について

これまでの検証を踏まえ、北大竹遺跡刀及び、同時期の単竜・単鳳環頭大刀が配布された人物の階層を最後に考察する。古墳時代後期後葉の関東地方における単竜・単鳳環頭大刀を出土した古墳からは、多くの武器・武具・馬具が伴う傾向にあ

る。この傾向は首長墓クラスのみでなく、群集墳クラスの古墳でも同じことがいえる。

装飾付大刀を出土する古墳について、新納は「首長墓型」と「群集墳型」に分けている（新納 1983）。「首長墓型」は、それぞれの地域で最上位に位置するような前方後円墳、大型円墳で、副葬品も豊富なものが該当する。一方で「群集墳型」は、直径 20m 以下の円墳が該当する。ただし、群集墳の中では他の古墳より一回り大きい古墳としている。新納曰く、関東地方を除けば「群集墳型」からの出土例が多い。

ここで、北大竹遺跡刀が作られた新納Ⅴ式段階に加え、ほぼ同時期に作られた新納Ⅳ、Ⅵ式も含めて環頭大刀を出土した古墳の墳丘規模をみてみよう（第 1、2 表）。この表は内山敏行が作成した表を参考に、筆者が作成したものである。それによると金鈴塚古墳以外は、全長 70m 以下の前方後円墳と径 30m 以下の円墳で占められている。

新納は上記の論文で、群馬県と千葉県などに装飾付大刀が出土した首長墓型の古墳が多いとした。しかし、内山敏行は両者を同列に扱うべきではないとしている（内山 2022）。

内山は、各県で装飾付大刀と小札甲が出土した古墳の墳丘規模を比較した。その結果、単竜・単鳳環頭大刀は、群馬県では中・小古墳で多く出土するのに対し、千葉県では墳長 63m 以上 90 m までの最有力前方後円墳と径 40m の大形円墳で出土することが指摘されている。具体的には、木更津市の金鈴塚古墳（前方後円墳、90 m）と香取市城山 1 号墳（前方後円墳、68 m）である。この傾向は、圭頭大刀などの袋頭大刀にも該当し、さらに千葉県では 1 つの古墳から同種の装飾付大刀が複数出土することを指摘している。内山はこれらのことから、千葉県域では政治的・軍事的地位を有力首長層が兼任しており、下位の中間層に

は割り当てられていなかったと主張した。一方埼玉県は、出土例が群馬県と同じく中・小古墳で出土する傾向にあるとされる。栃木県、茨城県北部も同様である。また、同じ武蔵でも東京都からは全く出土していない。

北大竹遺跡は古墳ではない。しかし金属製品以外にも、大量の土器、石製模造品、子持勾玉、玉類が出土していることと、長期間の祭祀が行われたであろうことから、古墳でいえば「首長墓型」に該当すると考える。埼玉古墳群、若小玉古墳群などの国造墓級の古墳群の近くに位置していることから、北大竹遺跡で祭祀を行った人物は国造級である可能性が高い。

このように関東地方の中でも、単竜・単鳳環頭大刀が出土する古墳には階層的な違いがあることから、配布元であるヤマト王権も明確に配布する階層を決めていなかったと考えられる。あるいは、ヤマト王権から関東地方内の首長層に配布されたのちに再配布が行われたのかもしれない。いずれにせよ副葬品による明確な差別化がなされなくなったことは、6 世紀代にヤマト王権の支配体制が大きく変わったことを示していると思われる。

以上、北大竹遺跡刀及び同時期の単竜・単鳳環頭大刀の配布先について考察した。配布先の古墳の階層は地域ごとにより異なっており、その決定権は配布元であるヤマト王権ではなく、関東地方の諸首長に一任されているようにみえる。

## おわりに

本稿では北大竹遺跡出土の単鳳環頭大刀の基本的な考古学的検証をおこなった。今後の課題として、大刀以外の金属製品の組成に注目し、北大竹遺跡で祭祀を行った人物の階層をより具体的に明らかにすることを目指したい。



第1表 関東地方における新納Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ式出土の古墳①（内山 2022 を参考に筆者作成）

墳丘規模	群馬	栃木	埼玉
第1クラス 61～90m			
第2クラス 30～60m	藤岡市諏訪神社古墳 ㉑ 57 玉村町小泉大塚越3号墳 ㉑ 46 玉村町房子塚古墳 ㉑ 45 藤岡市皇子塚古墳 ㉑ 31 小泉長塚1号墳 ㉑ 30？	益子町天王塚古墳 （荒久台1号墳） ㉑ 43	
第3クラス 30m未満	藤岡市平井地区1号墳 ㉑ 24 高崎市安坪12号墳 ㉑ 15		
墳形不明 出土遺構不明 古墳以外	前橋市（伝旧勢多郡南橘村） 太田市南金井亀山古墳群（Ⅵ） 群馬県高崎市倉賀野町（伝・Ⅳ） 群馬県内		加須市樋遣川古墳群 （宝塚古墳？） 皆野町稲荷塚古墳 行田市北大竹遺跡 （祭祀遺跡）

第2表 関東地方における新納Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ式出土の古墳②（内山 2022 を参考に筆者作成）

墳丘規模	茨城	千葉	神奈川
第1クラス 61～90m		木更津市金鈴塚古墳 ㉑ 90 （船載品） 市原市姉崎山王山古墳 ㉑ 69 香取市城山1号墳 ㉑ 68 （Ⅳ×2、Ⅴ×3）	藤沢市川名新林右西斜面 2号横穴
第2クラス 30～60m	常陸太田市幡山12号墳 ㉑ 30		
第3クラス 30m未満	八龍神塚古墳（Ⅳ） ㉑ 15		
墳形不明 出土遺構不明 古墳以外		翁作古墳	伊勢原市栗原古墳（Ⅳ） 海老名市本郷遺跡K O地区 （Ⅳ） 南足柄市塚田2号墳

※Ⅴ式以外は（ ）内に型式名を表示。

## 註

1 埼玉県は単竜・単鳳環頭大刀の出土が3例と著しく少ないことには注意しなくてはならない。同じ武蔵に当たる東京都でも少ないことから、武蔵では配布量が少なかった可能性はもちろんある。しかし、

当然武蔵にも後期群集墳は分布している。また、その他の環頭大刀や袋頭大刀は出土しているので、筆者は埼玉県内の資料が散逸・紛失している可能性を考える。

## 引用文献

- 穴沢咏光・馬目順一 1986 「単竜・単鳳環頭大刀の編年と系列 ― 福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単竜環頭大刀に寄せて ―」『福島考古』27 pp.1-22 福島県考古学会
- 白杵 勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』pp.49-70 創刊号 PHALANX ― 古墳文化研究会 ―
- 内山敏行 2022 「武器の副葬と軍事編成」上野祥史（編）『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』pp.121-136 六一書房
- 大谷晃二 2006 「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府弥生文化博物館・大阪府近つ飛鳥博物館共同研究成果報告書』pp.145-164 大阪府文化財センター
- 大谷晃二 2022 「金銀装大刀からみた金鈴塚古墳の被葬者像」上野祥史（編）『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』pp.81-120 六一書房
- 金 宇大 2015 「単龍・単鳳環頭大刀製作の展開」『古代武器研究』11 pp.83-102 古代武器研究会
- 金 宇大 2017 『金工品から読む古代朝鮮と倭 ― 新しい地域関係史へ ―』京都大学学術出版会
- 後藤守一 1936 「原始時代の武器と武装」『考古学講座』第 16 号 pp.273-288 国史講習会
- 志村哲 1993 『平井地区 1 号古墳』範囲確認調査報告書Ⅷ 藤岡市教育委員会
- 高橋健自 1911 「劔」『鏡と劔と玉』pp.124-177 富山房
- 栃木県 1976 『栃木県史』資料編 考古 1
- 中島直樹ほか 2006 『小泉長塚遺跡―民間開発（分譲住宅造成）に伴う埋蔵文化財発掘調査書―』玉村町埋蔵文化財発掘調査報告書第 77 集群馬県佐波郡玉村町教育委員会
- 新納 泉 1982 「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』65-4 pp.110-141 史学研究会
- 新納 泉 1983 「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30-3 pp.50-70 考古学研究会
- 宮塚義人・三浦京子 1993 『小泉大塚越遺跡―玉村町立芝根小学校移転建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―』玉村町埋蔵文化財調査報告書第 10 集
- 町田 章 1976 「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 28 pp.77-105 奈良国立文化財研究所
- 丸子 亘 1978 『小見川町城山第 1 号前方後円墳』小見川町教育委員会
- 向坂鋼二 1971 「飾大刀について」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県埋蔵文化財報告書 10 pp.39-47
- 持田大輔 2006 「龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』52（第 4 分冊）pp.139-148 早稲田大学大学院文学研究科
- 持田大輔・中條英樹 2009 「益子天王塚古墳出土遺物の調査（2）―環頭大刀・馬具―」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 10 号 pp.67-89 早稲田大学會津八一記念博物館
- 渡邊理伊知・赤熊浩一 2022 『北大竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 477 集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 図版出典

- 第 1 図 （渡邊・赤熊 2022）から引用
- 第 2 図 1、2 は筆者実測。3～5 は（大谷 2006）から引用、6 は（渡邊・赤熊 2022）から引用。
- 第 3 図 4 は筆者実測。他は（宮塚・三浦 1993）から引用。
- 第 4 図 （志村 1993）から引用。
- 第 5 図 （丸子 1978）から引用。